

プログラム・ノート

室田尚子

メンデルスゾーン：チェロ・ソナタ第1番 変ロ長調 作品45

ロマン派の作曲家の中で、フェリックス・メンデルスゾーン(1809～47)はもっとも保守的で古典的な作風をもっているといわれている。裕福なユダヤ人銀行家を父に持ち、幼い頃から神童としてその才能を発揮したメンデルスゾーンの生涯が、例えばショパンやシューマンに比べれば格段に順風満帆だったように、彼の音楽もまた、ロマン派的な激情とは無縁の安定感をもっているからだろう。しかし注意深く聴いてみれば、いくつかの作品には確かに「ロマン派の人」であるメンデルスゾーンの内面を感じ取ることができる。特に、彼が残した2つのチェロ・ソナタにはその色合いが濃い。

変ロ長調の第1番は、1838年に書かれた。古典的な形式感に貫かれた作品だが、随所に繊細な抒情があふれており、シューマンはこの曲を絶賛している。第1楽章はメンデルスゾーンには珍しく半音階が多用され、ピアノとチェロの掛け合いが時に陰りを帯びつつ盛り上がっていく。ト短調の第2楽章はひそやかな哀愁を帯びた主部と、優美で憧れに満ちた中間部をもつ三部形式。第3楽章は華やかな音楽が展開されるが、最後は意外にも繊細で穏やかに終わる。

メンデルスゾーン：チェロ・ソナタ第2番 ニ長調 作品58

第1番よりさらにロマンティックな楽想をもつ第2番は、1843年に作曲された。この年、メンデルスゾーンはライプツィヒ音楽院を創設するなど多忙を極めていたが、交響曲第3番「スコットランド」や劇音楽『真夏の夜の夢』など、いくつかの傑作を生み出した充実期に当たる。アマチュアのチェロ奏者だった弟のパウルや、親友のイタリア人チェロ奏者アルフレード・ピアッティ(1822～1901)に助言を受けながら完成。初演はメンデルスゾーン自身のピアノとピアッティのチェロで行われている。

全体は4楽章から成る。第1楽章はいきなり悠々としたメロディで始まり、一気に聴き手をロマン的抒情の中に誘う。チェロのピッツィカートが面白いスケルツォの第2楽章を経て、第3楽章はメンデルスゾーンが敬愛してやまないバッハのコラール風の音楽をピアノがアルペジオで演奏。やがてチェロがレクタティーヴォ風の連綿とした旋律を奏でる。終楽章は再び堂々とした音楽となり、チェロとピアノが華やかに曲を盛り上げて幕を閉じる。

(むろた なおこ・音楽ライター)